

解 答

【一】

- ① かな ② 師弟 ③ 臨 ④ 貯蔵 ⑤ 推

【二】

- 問一 a × b 残るのは c 存在が
問二 まず彼は
問三 しかしそう
問四 「最初」「人工的な」「最後」死を望む
問五 エ
問六 イ
問七 存在の道具によって、存在自体が規定され否定されているから。
問八 A × B × C ○ D ○

【三】

- 問一 その晩、ま
問二 A カ B キ C ウ D ク
問三 エ
問四 a お節介 b 厚かまし
問五 「わたし」に話す内容を杉田さんに聞かれてしまうこと。
問六 ア
問七 お互いに黙っていても居心地が悪く感じずに、体温がくすぐったくらい杉田さんを身近に感じている。
問八 I オバサン II 友達

解 説

【二】 出典は、立岩真也「希望について」。

「人生のことなど少しも分からない」、「どんな生き方がよいかわからない」が、「美しく死ぬ（＝「尊厳な死」）とかいうのはやめた方がよい」。今の我々の社会には、「生きていくための道具」はそろっているのだから、「一人ひとりの存在を認め、そのための道具を各人について用意する」ことで、人は生きられる。「ただの生がたんに肯定されればよい」のだ。

その論拠を筆者は以下のように述べている。

- 1 「人工的な延命」を拒否し、「自然な死」を望んだ男性。病気の「苦しさ」とそれに伴う「疲れ」、そして、人に「迷惑」を掛けまいとする心から、「生き続けたい」という意志を否定する方向を選択した。
- 2 こうした「尊厳な死」は、「なにか精神的に高い営みのように思うかもしれないが、それは違う」。「身体的にあるいは知的に、自らが何かができなくなるから、できる度合いが減るから、生きるのをやめさせよう、あるいは自らやめようという、それだけだ」。
- 3 しかし、「できる」こととは、「生きていくための道具」に過ぎないのだから、「できることが少なくなったから生きることを否定する」というのは、存在の道具によって存在が規定され否定されている」ことになる。
- 4 私たちの世界には、存在の道具は足りている。だから、「一人ひとりの存在を認め、そのための道具を各人について用意する」ことで、人は生きられる。

問二 挿入文からヒントを引き出します。「彼の書いたもの」＝川口武久氏の「四冊の著書」であること。「ただ」＝「前に述べたことについて留保・条件を付け加える接続語。ただし、もっとも、の意」であること。したがって、傍線Ⅰの直前「その意志を貫いて～ということになっている。」→挿入文の「ただ、～まったく単純ではない」というつながり方になります。なお、傍線Ⅰ直後の「まず」が挿入文を受けた表現であることもヒントになります。

問三 「こういう死に方」＝「人工的な延命を拒否し、自然な死を望む」患者が「その意志を貫いて亡くなった」ことを指しています。それは、「広くこの社会で」（＝3ページ「私たちのまわりに」、「周囲」に）起こっていることだ、という内容です。

問四 問二をヒントにします。段落冒頭の「まず彼は」から六行分「しかし」の直前までは、呼吸器を着けて人工的な延命を肯定しているという著書の内容が紹介されます。傍線2「当初の決定」とは、その六行分を飛び越えて、「彼は入院した」から始まる段落の内容を指しています。

問五 傍線3「ためらい」の五行前の「生きるために必要なことをなんでも要求するのはためらわれた」に注意します、

難病患者として、病院側や身近な人に、「生きるためになんでも要求する」または「呼吸器を装着して、ご迷惑をかける」ことに対して「ためらい」を感じていたのです。

問六 傍線4前後の六行分を熟読します。「迷惑をかけないこと」、「犠牲という行ない」を自分に対して課すのなら、まだよい。しかし、それを他人にまで要求するとなると問題だということです。なぜなら「自らの価値だったはずのものを自らが裏切ってしまう」、あるいは「その字との存在を否定することになり、その価値自体を裏切る」ことになるからです。

問七 先に記した要点3を参考にしてください。「できる」とは、本来「生きていく上で役に立つことができること」だ。つまり、まず「生きること」が何よりも大事であり、「生きる」ための手段・道具としてさまざまな「できる」があるにすぎないと筆者は言います。それなのに、「できることが少なくなったから生きることを否定するというのは、存在の道具によって存在が規定され否定されている」ということになり、大事さの順が逆であるということです。

問八 A 問二を参考にします。川口氏は「四冊の著書」の中で、呼吸器を装着し、人工的な延命を肯定しています。「ためらい」を見せていますから、「迷うことなく」が合いません。 B 4ページの3行目に「しかし苦痛は、医療者が下手でなければ、かなり軽減できるようになっている」とありますから、「それは今の医療の限界からして受け入れなければならない」が合いません。 C・Dともに本文最後の四つの段落に、つまり12行分に書かれています。

【三】 出典は、黒野伸一『万寿子さんの庭』。

アパートに越してきた若い女性の「わたし」は、隣の家一人で暮らすお年寄りの杉田さんと知り合う。お互い、盛んにおしゃべりするわけではないが、縁側に座って、黙って麦茶を飲んでいるだけで相手の温かさを身近に感じる。そこへ、厚化粧の太った女が、いきなり庭に入ってくる。彼女は、地区の民生委員だが、そのずうずうしい態度のせいで、杉田さんも「わたし」も好感をもてないでいる。

問一 前半の舞台は、日中、杉田さんの庭。後半は、その晩、「わたし」のアパートの玄関先です。

問二 選択肢はすべて擬態語ないし擬声語の副詞ですから、かかる語句に気をつけます。A「べらべら」が「しゃべる」にかかります。 B「遠慮なく、ずうずうしく」などの意の語句が「入ってくる」にかかります。 C「秘密を共有する少女のように（低い声で）」が「笑った」にかかります。D「むっとするくらいに、化粧を厚く、こってりと」などの意の語句が「塗った」にかかります。

問三・六 「わたし」のアパートを訪れた「太った女性」の話しぶりから、「七十歳を過ぎたら～」などと、実際の様子を知ろうともせず、杉田さんに一般論をあてはめ、「血圧も高いだろう」「認知症の症状も出始めてる」などと決めつけ（→問六）、世話を焼こうとしている、単なる「お節介」であることがわかります。満足な生活環境を整えるべき「福祉」なのに、相手のことを考えずに行うときには、単なる自己満足、お遊びであるということを杉田さんは皮肉っているのです（→問三）。

問四 問三で確認したように、「太った女性」＝近藤さんは、さしでがましく、また、自分の行為がさしでがましいということを認識できていません。杉田さんと近藤さんとのやりとりを目の当たりにした「わたし」も、近藤さんに対して同様の印象を抱いたのです。近藤さんに対する「私」のこのような感情が表れた表現を探します。

問五 直後に「女性は杉田さんの家を見やりながら」とあります。杉田さんのことを「わたし」に話をしている姿を、隣の家にいる本人に見られなくなかったのでしょう。

問七 設問文に、「箇所」を、「問題文中の語句を用いて」とあります。また「やぶさかではない」とは、「ためらわないう、喜んで～する」の意ですから、「ごく自然に彼女と触れ合」っていた場面を探します。（8ページ）の（3～5行目）に注目し、その際、「黙って」・「居心地」・「身近」・「体温」などのキーワードを必ず含めましょう。

問八 I 「ちゃんと杉田って名前がある」のに「おばあちゃん」と呼ぶ近藤さんのことを、杉田さんは「失礼だ」と感じています。そこで、逆に、近藤さんにも同じことをしてやろうということです。 II 杉田さんは近藤さんに「わたし」を「友達」だと紹介しています。「今までより、身近に感じる」ようになったばかりの杉田さんとの関係を「友達」と表現され、はじめは驚く「わたし」も、近藤さんを「オバサン」と呼ぼうか、というささやかな企みに「秘密を共有する少女のように」共感したことなどを経て、杉田さんを「友達」だと認識していくのです。